

【公開講座要旨】

天台智顗における法身菩薩について

研究員 井上 智裕

中国における仏教受容において法身の理解は重要な問題であり、羅什と廬山の慧遠との問答をまとめた『大乗大義章』に詳細に論じられている。その中に、『大智度論』などの説を基に、無生法忍を得てから成仏するまでの菩薩行の体も法身とし、法身から変化し衆生に応現するとされるように、仏のみではなく菩薩においても法身を得ることが論じられているのである。

こうした法身菩薩に関する説は天台大師智顗の教学においても用いられており、行位論や仏土説の中にその記述が見られる。この法身菩薩に関する解釈は、後に日本天台において仏を論じる規定の問題や行位論の複雑さなどから、様々な議論に展開していくのである。そこで天台の法身菩薩の解釈の基となった、智顗における法身菩薩の理解について検討を試みる。

まず仏土説における法身菩薩の説明を概観する。天台四土説には、果報土として法身菩薩のみの所居が説かれる。ここで法身菩薩は、一実諦の理を觀て分に無明を破すのであるが、無明の惑を破し尽くしていないことによって、その無明が因となり無漏の業が潤されて身を受ける菩薩とさ

れる。また『大智度論』をもとにこの法身菩薩の為に法身の仏が法を説くというのであり、法身仏の教化を受ける菩薩とされる。さらに智顗は、法身菩薩の得ている無生法忍と仏の寂滅忍とを理と事との観点から異なりを論じ、法身菩薩が分に理を証することも寂滅忍とするのであるが、仏果にゆずって無生法忍とするというのであり、法身菩薩の証している理は一分のものではあるが、仏と同様の理であるというのである。

また天台の行位論において法身菩薩は聖位として円教五十二位の中、十住の初住以上に配される。この円教の行位は、理である実相の面からは行位といった階梯は無いのであるが、実相を捉える側の問題として位が論じられるのである。この円教の初住は、三徳涅槃に住することであり、仏眼を得て十法界の三諦の法を見、様々な法門に入り、あらゆる神通をもって法界に満ちて衆生を利益する位とされる。さらに初住について実相の理を証し無明を破していくことによって、分分に二十五三昧を得、二十五有の衆生に応じると自行と化他を一体のものとして論じているのである。つまり、初住以降の法身菩薩は、その断惑証理がそのまま衆生に應じて教化していくこととされるのである。

この法身菩薩が衆生に應じるということを智顗は『維摩經玄疏』において本迹の関係によって説明する。すなわち、

本として実相の理を証することによって、衆生に応じる迹を垂れるのであり、その迹によって本である理が顕されると実相を根底においた本迹論によって説明していくのである。また、より具体的に法身菩薩を經典に説かれる菩薩のみを指すのではなく、諸経論を造った無著や龍樹などの諸師、さらには老莊の聖人、孔子なども、法身菩薩が衆生を教化するために現れた迹であり、その本は法身菩薩として捉えているのである。

しかし、こういった法身菩薩を解説する段において、しばしば智顗は、聖位や法身菩薩のあり方は、凡夫の思議を超えた不思議なるものであつて、みだりに説くべきでも、凡夫が推し量るべきでもないというのである。さらに天台の説法は初心にあるというのであり、仏果に趣向していく衆生を重視する姿勢が見られるのである。

このように智顗において法身菩薩は、断惑証理という点で仏とは異なるが、仏と同様に実相の理を証しながら、仏果へ趣こうとする衆生の感に応じ、衆生を実相の理へと導くことをはたらきかけるものとして捉えられているのであらう。